火山の名について

寺田寅彦

日本から南洋へかけての火山の活動の時間分布を調べているうちに、火山の名前の中には互いによく似通（にかよ）ったのが広く分布されていることに気がついた。たとえば日本の「アソ」、「ウス」、「オソレ」、「エサン」、「ウンセン」等に対してカムチャツカの「ウソン」、マリアナ群島の「アソンソン」、スマトラの「オサール」などがあり、またわが国の「ツルミ岳」、「タルマイ山」、「ダルマ山」に対しジャヴァの「ティエリマイ」、「デラメン」などがあるという類である。それで、これは偶然の暗合であるか、あるいはこれらの間にいくぶんかの必然的関係があるかをできるなら統計学的の考えか

ら決定したいと思ったのである。

この統計の基礎的の材料として第一に必要なものは火山名の表である。しかしこの表を完全に作るということがかなりな難事業である。まずたくさんの山の中から火山を拾い出し、それを活火山と消火山に分類し、あるいは形態的にコニーデ、トロイデ、アスピーテ等に区別することは地質学者のほうで完成されているとしても、おのおのの山には多くの場合に二つ以上の名称がありまた一つの火山系の各峰がそれぞれ別々の名をもっているのをいかに取り扱うかの問題が起こる。

また火山の名が同時に郡の名や国の名であったりす

ることがしばしばある。その場合そのいずれが先であるかが問題となる。国郡のごとき行政区画のできるはるかに前から、火山の名が存し、それが顕著な目標として国郡名に適用されたであろうとは思われるが、これも確証することはむつかしい。

　山の名の起原についてはそれぞれいろいろの伝説があり、また北海道の山名などではいかにももっともらしい解釈が一つ一つにつけられている。これをことごとく信用するとすれば自分の企てている統計的研究の結果が、できたとしても、それは言語学的に貢献することは僅少（きんしょう）となるであろう。しかし自分の見るとこ

ろではこれらの伝説は自然科学的の立場から見ればほとんど無価値なものであり、またアイヌ語による解釈も部分的には正しいかもしれないが到底全部が正しくないことは、人によって説の違う事実からでも説明される。

それで唯一の科学的方法はこれらのあらゆる不確実な伝説や付会説をひとまず全部無視して、そうして現在の山名そのものを採り、全く機械的に統計にかけることである。たとえば硫黄岳（いおうだけ）とか硫黄山と言っても、それがはたして硫黄を意味するものであるか実は不明である。のみならずむしろあとから「硫黄（いおう）」をうまく

はめ込んだものらしいと思われるふしもある。むしろ北海道の岩雄山（いわおやま）や九州の由布岳（ゆふだけ）などと関係がありはしないかと疑われる。ともかくもこれらの名前を一定の方式に従って統計的に取り扱い、その結果がよければ前提が是認され、悪ければ否定されるのである。

　完全な材料はなかなか急には得難いので、ここではまず最初の試みとして東京天文台編「理科年表」昭和五年版の「本邦のおもな火山」の表を採ることにする。これは現在の目的とはなんの関係なしに作られたものであるから、自分の勝手がきかないところに強みがある。これを採用するとした上で山名の読み方が問題と

なるが、これは「大日本地名辞書」により、そのほかには小川（おがわ）氏著「日本地図帳地名索引」、また「言泉」等によることにした。それにしても、たとえば海門岳（かいもんだけ）が昔は開聞でヒラキキと呼ばれ、ヒラキキ神社があるなどと言われるとちょっと迷わされるが、よくよく考えてみるとむしろカイモンが始めであろうとも考えられる節があり、千島（ちしま）のカイモンと同系と考えるほうがよさそうにも思われ、少なくも両方に同等の蓋然性（がいぜんせい）がある。それでこれらもすべて現在の確実な事実としての名だけを採る事にする。千島の分だけはいろいろの困難があるので除き、また台湾（たいわん）、朝鮮（ちょうせん）も除く事とする。

さて Aso, Usu, Uns(z)en, Esan の四つを取ってみる。これはいずれも母音で始まり、次に子音で始まる綴音（てつおん）が来る。終わりのｎは問題外とする。

一般に母音で始まり次にいずれか任意の一つの子音の来る場合が火山の表中で何個あるかを数えてみる。この数を N(VC) で表わす。するとこの中である特定の一つの子音、たとえばＳならＳが出現するという事のプロバビリテーはいくらか。この確率は可能な子音の種類の数（Ｑとする）の逆数となる。それで全然偶然的暗合ならば現われるべきこの型の火山名の数ｎは N(VC)÷Ｑになるはずである。しかるに実際にはこの

特定型のものがｍ個あるとする（アソの場合ではｍ＝４）。さすれば

R＝実際数m/偶然数ｎ＝mQ/N(VC)［＃「実際数m/偶然数ｎ」「mQ/N(VC)」は分数］

なる比が大きいほど暗合でないらしい、何か関係があるらしい確率が増すのである。少なくともｍ個のうちの若干は互いに関係がありそうだということになるであろう。もっとも厳密に言えばこのほかに日本語の特徴としてはこのような組み合わせの現われる一般的の確率を考慮に入れるべきであるが、これは容易でないからしばらく度外視する。

子音数Qをどう取るかがかなりむつかしい問題になるが、「アソ」の場合は、かりにこれを9と取る。すなわち（k, g）（s, z）（t, d）（n）（p, b, h）（m, b, mb, np）（y）（r）（w）の9とする。また山名としては山・岳・島・登・ヌプリ・峰等の文字を引き去った残りだけを取り扱う事にする。ただし白山（はくさん）・月山（がっさん）はそのままに取る。またシラブルの終わりのnは除外することにする。

まず歴史時代に噴火の記録のあるものだけについて見ると N(VC)=8である。（ただし硫黄、岩雄も iwo, iwao としてこの部分に算入する。すなわちわざと都合の悪いほうを選ぶのである。）さすれば R=4×9÷

8 = 4.5 となる。少し虫のよい取り方をして硫黄、岩雄を Yuwo, Yuwao と見て除けば N(VC) = 4 となり R = 9 となる。

次に消火山活火山をも合わせて取り扱う場合には、N'(VC) = 11 となり、R = 3.3 に減ずるが、硫黄・岩雄の頭が y なる子音だとして、このアソ型から除けば R = 5.1 となる。

次に Koma（駒が岳）, Kaimon, Kume（久米島）, Kimpu(Kibô), Kampu, Kombu, Kamui を取れば m = 7 である。この場合は子音始まりで子音二つの場合として、一般の子音二つのものの数 N(CC) を求めると、

消火山も入れてであるからN(CC) = 48である。ここでも子音数をQとする偶然の確率は1 ÷ Q(Q-1)（ただし子音二つが異なるとして）であるから

R = mQ(Q-1)/N(CC)［#「mQ(Q-1)/N(CC)」は分数］

Q = 9, m = 7, N = 48であればR = 10.5となる。活火山だけだとm = 2なる代わりにN = 14となるのでR = 10.3でやはりほぼ同値となる。いずれにしても偶然の場合とは桁数（けたすう）がちがって多い。この場合でも一般の日本語にkmなる結合の起こる確率を考慮に入れて補正すればよいが、これはしばらく省略するほかはない。

しかしこれは現在の場合結果の桁数を変えるほどの影響がありそうもないことは少しあたってみてもわかると思う。

Turumi, Tarumai, Daruma の場合は、活火山だけだとタルマイ一つ、すなわち m = 1 で統計価値があまりに少ないから、消火山も入れて n = 3 の場合を考える。この場合は子音三つであってNの最多数な場合である。それでもしこの場合の数 N(CCC) を現在の表中の火山の総数に等しいと取れば、これは結果のRを少なくするほうの取り方であるからこれで得られたRが大きければ、ほんとうはもっと大きい事になる。そ

れでかりにそうしてみる。さすればこの場合N(CCC) = 167, m = 3 また子音三個の組み合わせの順列の数は 9×8×7 = 504 であるから、R = 3×504÷167 = 9.0 強となる。

鳥海山はトリノウミと言ったらしい形跡があるので、これも入れるとするとRはさらに四分の五倍だけに増すわけである。

次に問題になるのは F(H)uz(d, t)i, Hiuti, Kudyôdu(sima), Kuti(no sima) の類である。KとHは日本語でもしばしば転化するからここではかりに同じと見て、次のような子音分類をする。すなわち(k, g, h, f)と(t,

d, s, z）とを対立させると子音群数は$Q = 7$となる。この場合$N(CC) = 48$であって$m = 9$（火山名略）であるから$R = 7.6$となる。

次にはYuwoo, Yuwao, Yufuを取り三つの「硫黄（いおう）」を名とする火山を三つに数えると$n = 5$となり、子音数9とすれば$R = 5 \times 72 \div 47 = 7.5$となる。

以上の場合に得たRの価はいずれも1に対して相当多いものである。従って単なる偶然と見る事は少しむつかしく思われて来るのである。もちろんこれらが全部関係があるということは言われないが、これらのうち若干は連関しているであろうということを暗示する

には充分であると思う。それでもし偶然でないとすれば以上にあげたような言語要素がいろいろな形で他の火山名の中にも現われていはしないかと思われる。また一方で同じ要素が南洋その他の方面にありはしないかと思われる。また南洋の言語中には従来の言語学者の説のごとく世界じゅうの言語が混合しているとすれば逆に遠い外国の意外のへんにも同じ要素が認められはしないかという疑いが起こる。それで試みに同型の疑いのある火山名を次ページの表に列挙して将来の参考に供しておきたいと思うのである。中には現在の形での意味がかなり明白だと思うのがあってもかりに除

かないで採録しておくことにする。（外国火山名はおもにウォルフによる。）

第一表

アソ・アサマ型

（本邦）（外国）

Aso

Usu

Unsen, Unzen

Esan

Unsyô（阿蘇の峰名）

ô（〃）

Osore

Rausu

Rausi

Rasyowa

Gwassan
Bessan（白山の一峰）
Buson

Nasu
Kasa
Kesamaru

Asakusa

Asitaka

Asahi

Usisir（千島の宇志知）

Asama

Aduma, Azuma

Sanbe

Sambon

Sumon

Samasana（火焼島）

Shumshu

Shimshir（千島の新知）

Izuna, Iduna

Udone

Uson（カムチャツカ）

Assongsong（マリアナ）

Azuay（南米）

Asososco（中米）

Asur, Yasowa, Yosur, Yosua

（ニューヘブリデス）

Ossar（スマトラ）
Azul（南米）
Osorno（〃）
Izalco（中米）
Lesson（ニューギニア）
Lassen（カルフォルニア）

Vesuvio（イタリア）
Assatscha（カムチャツカ）
Askja（アイスランド）

Kara Aassam（スンダ）
Pasaman Telamen（スマトラ）
Pasema（〃）

Soemoe（スマトラ）
Semeroe（ジャヴァ）
Soembing（〃）
Semongkron（〃）
Glé Samalanga（スマトラ）
Samasate（中米）
Saba（西インド）

Etna（イタリア）

（このほかの at-, ad- 型略す）

第二表

ツルミ・タラ型

（本邦）

（外国）

Turumi

Daruma

Tarumai

Torinoumi（鳥海）

Chiripu

Chiripoi

Patarabe, Beritaribe

Tara

Tanra（済州島）

Tori（鳥島）

Tenryû（白山絶頂）

Adatara

Hutara

Kutara

Madarao

Tjerimai（ジャヴァ）

Taroeb（〃）

Delamen（〃）

Sahen Daroeman（サンギ）

Pasaman Telamen（スマトラ）

Talla-ma-Kieë（ハルマヘラ）

Tulabug（南米）

Talima（〃）

Toliman（中米）

Tolo（ハルマヘラ）

Tara（〃）
Taal（タール）
Talu（スンダ）
Tauro（サロモン）
Toro（南米）
Tĕlĕrep（ジャヴァ）
Teleki（東アフリカ）
Tarakan（ハルマヘラ）
Telok（スンダ）
Tulik（アリウシャン）
Telica（中米）

Talang（スマトラ）

Tarawera（ニュージーランド）

Talasiquin（ズールー）

Tultul（南米）

Turrialba（中米，白塔）

Tjilering（ジャヴァ）

このほかにまだコマ・カンプ型、クジウ型およびイワウ型があるがこれは今回は略し、他日の機会に譲る

こととする。

この表中にヨーロッパやアメリカなどの火山が出て来るのを見て笑う人もあろうと思うが、しかし南洋語と欧州語との間の親族関係がかなり明らかにされている今日、日本だけが特別な箱入りの国土と考えるのはあまりにおかしい考えである。これについてはどうか私が先年「思想」に出した「比較言語学における統計的研究法の可能性について」を参照されたい。

また言語学者のほうからは、私の以上の扱い方が音韻転化の方則などを無視しているではないかという非難を受けるかと思う。しかしグリムの方則のような箇

単明瞭（めいりょう）なものは大陸で民族の大集団が移動し接触する時には行なわれるとしても、日本のような特殊な地理的関係にある土地で、小さな集団が、いろいろの方面から、幾度となく入り込んだかもしれない所では、この方則はあるにはあっても複雑なものであろうと予期するほうが合理的である。これを分析的に見つけて行くのが、これからの長い将来の仕事でなければならない。それで私の現在の仕事は、そういう方面への第一歩として、一つの作業仮説のようなものを持ち出したに過ぎないのである。

以上の調べの結果で、たとえば Aso, Usu, Esan,

Uson, Asur, Osore, Ossar 等が意味の上で関係があると仮定すれば、これはいったい何を意味するかが問題となる。たとえば南洋エファテのAso（燃える）Asua（煙る）サモアのAsu（煙）や、マレーのAsap（煙）（マレイでは火山はGunong berasap すなわち煙山ともGunong berapi 火山ともいう。Asap はAsama にも通う（かよう））。あるいはヘブリウの ‘Esh（火）、‘as´en（煙る）、‘as´an（くすぶる）などが示唆され、これと関係あるアラビアの ‘atana（煙る）から西のほうへたぐって行ってイタリアの Etna 火山を思わせ、さらに翻ってわが国の Iduna を思わせる。しからばこれ

はセミティク系の言葉かと思っているとまたたとえばスキートの説によればギリシアの eusein（燃える、焦げる）はインドゲルマンの理論上の語根 eus とつながり、アングロサクソンの Yslan（熱灰）の源であり、サンスクリットの語根 Ush（燃える）ともつながるとある。アイスランドの火山 Askja は同国古語の Aska（灰）であるとすれば、これは英語の ashes（灰）と親類だそうである。そこで今度は試みに「灰」を意味する語を物色してみると、サンスクリットに Bhasman, Bhuti があるが、この前者は Asama 後者は Huti(Fuzi) を思わせる。頭の子音 Bh と B をドロップさせるのが

おもしろい。一方でわが国に Buson という消火山のあるのはなおおもしろい。白山(はくさん)の一峰を Bessan というのもこれに類する。これもBを除去すればアソ型となるのである。またこれにつづいて考えることは Rausu, Rausi, Rasyowa のアイヌ系のものから始めのRを除き Lesson, Lassen からLを取るとアソ型に接近する。これも興味がある。マレイ語から語頭のLを除くと日本語に似るものの多い事はすでに先覚者も注意した事である。その他にも頭の子音を除いてアソ型になるもの Kasa, Daisen, Tyausu, Nasu があることに注意したい。しかし私はこのようなわずかの材料か

ら語原説などを提出する意は毛頭ない。ただ、一つの興味ある事実を注意するだけである。

コマ型、タラ型、フジ・クジウ型、ユワウ型についても同様なことが言われるのであるが、これらは後日さらに詳しく考えてみたいと思う。今回は紙数の制限もあるので以上の予備的概論にとどめ、ただ多少の見込みのありそうな一つの道を暗示するだけの意味でしるしたに過ぎない。従って意を尽くさない点のはなはだ多いのを遺憾とする。ともかくもかかる研究の対象としては火山の名が最も適当なものの一つであることは明らかであろう。たとえば川の名ではこういう方法

は到底むつかしいと考えられる。最も顕著な特徴をもって原始民の心に最も強く訴えたであろうと思わる る地上の目標として火山にまさるものはないのである。しかしそういう目標に名前がつけられ、その名前がいよいよ固定してしまい、生き残りうるためには特別な条件が具足することが必要であると思われる。単に理屈がうまいとか、口調がいいとかいうだけでは決して長い時の試練に堪えないかと思われる。従来の地名の研究には私の知る限りこの必要条件の考察が少しも加わっていないではないかと思われる。この条件が何であるかについては他日また愚見を述べて学者の批評を

仰ぎたいと思っている。

（昭和六年一月、郷土）

底本：「寺田寅彦随筆集　第三巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店
１９４８（昭和23）年5月15日第1刷発行
１９６３（昭和38）年4月16日第20刷改版発行
１９９７（平成9）年9月5日第64刷発行
入力：(株)モモ
校正：かとうかおり
２０００年10月3日公開
２００４年3月10日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。